

久留米市立南筑高等学校演劇部
平成二十三年度 公演作品

カタイジ

(最終版)

高場光春
作

登場人物

原 久子……3年。水泳部。
火野 茜……3年。水泳部キャプテン。
木立風花……2年。水泳部。
水森澄香……2年。水泳部。
照山陽菜……1年。水泳部。

幕が開く。

ある蒸し暑い夏の日の日暮れ前。

旅館というよりは合宿所といった、やや広い和室。

下手が出入口で、上手が窓という設定。

上手の隅に、折りたたみ式のローテーブルが置かれている。

その付近にボストンバッグやスポーツバッグの類が整然と置かれている。

だが一際目に付くのは、上手に設置された簡易組み立て式の蚊帳である。

蚊帳の中で、陽菜が寝ている。

下手より、原が入ってくる。

原：陽菜ちゃん、まだ寝てる。

風花が入ってくる。

原 ああ、もう、めっちゃ最悪。

風花 すごかったですもんね。あのにんにく。

原 ありえないし。人の迷惑も考えろって。

風花 それ？

原 これ？ ファブリーズ。

風花 持ってきてたんですか。

原 一応。念のためと思って。良かった。大正解。

陽菜 **(がばっと目を覚ます。)**

原 あ、陽菜ちゃん。

陽菜 腹減った。あ、先輩、先輩。雨 もう上がりました？

原 え？

陽菜 先輩。雨。

原 ん？ うん。

陽菜 やった。**(蚊帳から出てる。)**

原 もう大丈夫？

陽菜 この通り。あれ、もうご飯食べてきたんですか？

原 あ、ごめん。陽菜ちゃん寝てたから。で、何これ。

陽菜 蚊帳です。

原 それは分かってるけど。

陽菜 蚊、多いって聞いてたんで。じゃ、私もご飯食べてきま〜す。

原 あ、はい。

陽菜 って、場所どこですか。

原 え？

陽菜 ご飯。

原 ああ。下行って、階段の、右を…。

陽菜 ああ、まっすぐ。

原 そうそう。

陽菜 了解です。じゃあ、行ってきます。

原 行ったらっしやい。

陽菜 水森先輩は？ まだいるんですか、ご飯。

原 いや、もう食べ終わってたよ。

陽菜 え、じゃあどこ。トイレ？

原 なんか、虫取りに行くとか。ね。

風花 うん。

陽菜 虫？

原 なんかに、すごい浮かれてた。子どもみたいに。

陽菜 へえ。あ、じゃあとりあえず、ご飯食べてきます。

原 はい。

陽菜 そういえば、ごめんなさい。練習休んじゃって。

原 いや、いいいいいよ。

陽菜 火野先輩、何か言っていました？

原 いや、基本、あつちはうちらと一緒にじゃなかったんで。

陽菜 大丈夫ですかね？

原 大丈夫、じゃない？ ね。

風花 うん。

陽菜 あ、まだ食堂いたりします？

原 いやあ、どうかな。かも。

陽菜 うわあ。でも、ま、何とかなるでしょ。じゃ、行ってきました。

原 はい。

陽菜 ところでどこでどこでどこで。

原 早く行きなよ、なくなるよ。

陽菜 今日の夕食何でした？

原 行けば分かるよ。

陽菜 なんかに、ガリッ的な？

原 え？

陽菜 なんかに、臭ったんで。

原 うっそ、最悪。

陽菜 行ってきました。

陽菜、出つく。

原 もう、全然臭い取れてないじゃない。

風花 先輩、私も。

原、風花、ファブリーズをする。

風花 窓、開けますね。

原 だめ！

風花 何ですか。

原 蚊が入ってくるから。

風花 大丈夫ですよ。網戸ありますし。

原 破れてるし。

風花 ちよっただけ。

原 どれくらい。

風花 五分。

原 長い。

風花 三分。

原 うーん。

風花 一分。

原 絶対だぞ。

風花 はい。

原 あ、待って。

風花 何ですか。

原 これ。
風花 え？

原 これで、破れてるところを押さえてれば、入ってこないんじゃないかな
蚊。

風花 えっと。

原 こうして、こう。

風花 こう？

原 そう。

風花 こう？

原 そう。

風花 ずっと？

原 ずっと？

風花 一分間。

原 てゆうかさ、蚊帳ってどう。普通持つてくる、こんななの？

風花 だつて陽菜ちゃんですから。

原 ホント変わつてるよね、あの子。

風花 天氣に、もろ左右されますからね。

原 練習だつてさ、天氣いい時はオリンピック選手並みに記録出すのに。

風花 そうそう。雨降った時は、見るも無残ですからね。

原 梅雨明けの前は、ほとんど学校も休んでたみたいで。

風花 あ、だから部活も休んでたんだ。

原 唯一の新人部員がこれじゃあ。

風花 うわ、蚊が！ 蚊が！

原 おい、手を離すな！

風花 だつて。

原 窓閉めて！

風花 あ、はい！

原 くそ、入ってきた？

風花 あ、そこそこ、先輩！

原 どこどこ？

風花 そこです、そこ。

原 どこ？

風花 あ、どっか行つた。

原 もう。

風花 あ、あっち。

原 うそ。

風花 あ、（パチン）

原 取った？

風花 いや。

原 もう！

風花 あ、（パチンパチンパチンパチン）

原 早く！

風花 （パチン）

原 ちよっと、蚊多すぎじゃね。もう、ここやだ。

風花 いい場所なんですけどね。空気がきれいで。

原 空気がきれいなんでどうでもいい。もう無理。早く帰りたい。

風花 合宿は、今日が初日ですよ。

原 あと三日もあるのか。

風花 でも、去年よりか、だいぶ減った気がしません、蚊？
原 そうか？

風花 何となくですけど。

原 じゃあ、やつは効いてるんだ。

風花 効いてる？ 何がですか。

原 じゃじゃん。

風花 じゃじゃん、て。

原 じゃじゃん。

風花 何ですか、それ。

原 ベープ。知らない？ 電気蚊取り。

風花 ああ。電池式の蚊取り線香みたいな。

原 そうそう。

風花 へえ、初めて見た。

原 うっそ。私はずっとこれ。

風花 家でも？

原 うん。

風花 へえ。あ、じゃあこれで結構蚊が寄ってこないってことですか。

原 じゃない？ 昼間部屋着いて、速攻つけといたから。

風花 へえ、すごいすごい。

原 え、何。風花んとは、蚊取り線香？

風花 いえ、うちは、あ、マンションだからですかね、十五階なんで、あんまり蚊、いないっていうか。

原 え、いいなあ。

風花 ごくたまに、ホント、あ、刺された？ みたいなことはありますけど。

原 いいなあ、うらやましい。うちなんか蚊とかハエだけじゃなくて、たまにアブとかも出るからね、こんなでっかい。

風花 どこ住んでるんですか。

原 ま、簡単に言うとお田舎だね。周り田んぼばかり。

風花 あ、何か言っていましたね。

原 じいちゃんがまだ農業やってるんだけど、有機栽培？とか言って、農業とか全然使わないで。

風花 あれでしょ。レタスに虫ついてた事件。

原 そうそう。虫も食べにくるほどおいしい野菜。って。いやいや、農業まこうよ、じいちゃん、て感じ。

風花 何か体に良さそうじゃないですか。

原 いい迷惑だよ。何か、じいちゃん、若い頃からポリシーがあるんだって。

風花 ポリシー？

原 なんか、ある時から「もう二度と、農業は使わない」って、堅く心に誓ったんだって。

風花 いいじゃないですか。

原 どこか。おかげで虫だらけ。バッタとか。

風花 え、そんなのにも効くんですか、これ。

原 まさか。そんなときは、これをシュートだよ。

風花 キンチョール。

原 じいちゃんには内緒なんだけど、アブとかゴキブリとか出たときは、さすがにね。一応持ってきた。

風花 ホント用意いいですね。

原 三年目だからね、この合宿。

風花 この蚊の多さには参りますよね。

原 虫除け対策しとけとは言ったけど、まさか、蚊帳を持ってくる奴がいるとはね。

風花 ってゆうか、これ（ベープ）って、どういう仕組みなんですかね。

原 どういうって。
風花 ほら、煙とかも出てないし。

原 あ。

風花 知ってます、先輩？

原 いや、何か、何か出てるんだろーね、ここから。何か、蚊を退治するビームみたいなやつが。ビーツって。

風花 ああ、ビームが。

原 いや、ビームじゃないけど、そんな感じの、何か。何かよ、きつと。ま、何か、出てるんでしょーね。

風花 うん、何か出てるのよ。何か、すごいものがあ。

風花 バッグからうちわを取り出してきて、扇ぎ始める。

原 何してるの。

風花 これ、風を起こしたら、効果が上がるかなと思って。

原 まさか。

風花 やってみる価値はあると思うんですよ。これって、何か出てるとしても、出方としては、こう、何ていうか、じわじわくっつけて感じでしょ。だけど、こうやると、効き目がその、がががぐわくんって広がるんじゃないかって思っ。だから。

原 ああね。

風花 先輩もやってみたらどうです。

原 え？

風花 早く。
原 はい。あんた何でそんなうちわ持ってきてるの。

二人、うちわで扇ぐ。

原 …この、蚊の存在価値って何。

風花 え。

原 血吸って、夜中とか耳元でFUNって。ああ、イライラする。別ににくてもよくね、蚊？ なんか地球に貢献してるわけ、蚊！

風花 まあまあ。ところで、先輩、大会はどうするんですか。

原 どう、って。

風花 リレーのメンバーです。

原 さあ。

風花 さあ、って。

原 私があれこれ言っても、決めるのは茜だし。でも。

風花 何のかんの言っても、うちは茜でもってるようなもんだし。分かってますけど。

原 けど？

風花 何か、納得できないんですよ。

水森が、虫かごと虫取り網を持って入ってくる。

水森 ただいまー！ ってあれ、何やってんですか。

原 ああ、お帰り。

水森 あれ、陽菜ちゃんは？

原 ご飯食べに行った。

水森 具合は？ もう、いいんですか。

原 あの子は、天気がいいと体調良くなるから。

水森 そっか。てゆうか（蚊帳）すごく邪魔なんですけど。

原 それ何？

水森 え？ えへへ。見てくださいよ、これこれ。

風花 何なに。うわっ！

水森 大丈夫よ、逃げたりしないから。

原 バッタ？

水森 そう！ もうわさわさ跳んで。何て言うか、その、入れ喰い状態。

原 どうすんの、それ？

水森 これですか。餌です。

原 餌？

水森 はい。去年、ここでカエル取ったじゃないですか、私。覚えてます？

風花 そうそう、アマガエルばかり十匹くらい。

水森 あのアマガエル、まだ四匹くらい死なずに生きてるんですけど。知ってます？ カエルって、生きた虫とかじゃないと食べないんですよ。

原 え、カエルの餌にするの？

水森 都会じゃなかなかこんなにバッタは獲れませんよ。

原 え、だから、餌にするの、カエルの？

水森 そうですよ。ピキタンと、ビッキと、ケロ子とケロ吉の。

風花 名前付けてんだ。

原 なんか、残酷。

水森 ああ、早くみんなの喜ぶ顔がみたいわ。

風花 カエルも笑ったりするの。

水森 するよ。カエルだって人間だもん。

風花 いや、意味分かんないんだけど。

原 普段は何やってるの。

水森 え。

原 いや、餌。カエルの。

水森 そうですね、普段は、ハエとか、クモとか。まあ、クモが多いかな。

原 捕まえて？

水森 うん。

原 うわ。

水森 うわ、て。

原 で、そのバッタたちも、そのカエルたちの餌食になるわけね。

水森 餌食って先輩、人聞きの悪い。もともと、ケロ子たちはここが古里なわけじゃないですか。だから、このバッタたちを食べたら、何ていうか、郷土料理を思い出す感じになるんじゃないかな。

風花 郷土料理…。

水森 ん。ノスタルジック。

原 あんた、練習のときより、なんか生き生きしてるわね。

水森 そんなことないですよ。どっちも一生懸命ですって。

原 虫取りに行くような元気があるんだったら、まだまだ練習量が足りないってことじゃない。もう少し泳いできたら？ 一万メートルくらい。

水森 違いますって。ほら、部活の元気と、こっちの元気は、ベツキンですから。

風花 ベツキン？

水森 別の筋肉。ベツキン。

原 どっちにしても、逃げないようにちゃんとふた閉めててよね。私、虫大

水森 つ嫌いなんだから。
それは大丈夫です。

原 …あれ？

水森 何ですか。

原 あれ？

水森 な、何ですか。人の顔じろじろ見て。

原 澄香ちゃん、目、何かした？

水森 え？ えへへ。

原 えへへ、て。

風花 二重。

水森 気つきました？

原 いや、プール入つてるときから何となく違和感はあったんだけど。

水森 合宿前に。

原 でしょ？ 何か顔が変だったけど、プール上がりだから、まあ、そんなもんかなって、思ってたんだけど。

水森 変ですか。

原 いや、かわいいよ。

風花 整形、したの、やつぱり？

水森 そうそう。アイプチじゃ、長くプールに入れないじゃん。

原 安いの使ってるからでしょ。

水森 だから、いつそ整形した方がお得かなって。

原 親からもらった体を。

水森 親も公認ですもん。一重に産んじやってごめんね、って。

風花 へ。物分りがいいんだか何なんだか。

原 人間は持つて生まれたまんまが、個性なのに。人工的に手を加えるのはねえ。

水森 結構、古いんですね、先輩。

原 そう？

水森 てゆうか先輩はモテるからいいんですよ。何の苦勞もなくて。

原 モテないって。

水森 実際のところ、どうなんですか。彼氏とか。

原 いないよ。

水森 またまた。

原 ホントにいないって。

水森 もう、隠し事はなしなし。せつかくの機会だから、ここは正直にぶっちゃけましょう！

原 いやよ。

水森 どうなんですか。先輩。いるんですか、いないんですか、彼氏。

原 やめてよ。

風花 それより、ここ幽霊とか出ない？

水森 は？

風花 ここ、幽霊とか、出ない？

水森 なぜ今それを言う。

風花 ふと気になって。

水森 いや、唐突過ぎでしょ。

原 それがね、出るのよ、ここ。

風花 いやあ〜。

水森 先輩も乗らない。

原 何個か上の先輩に聞いたんだけどね。

水森 だから先輩。話をはぐらかさないでください。

原 昔、ここに大きな池があつてね。
水森 わーわーわーわーわーわー。
風花 もう、澄香ちゃんうるさい。
水森 うるさくない。

原 澄香、こういう話、実は苦手？

水森 に、苦手じゃないですけど。

風花 苦手なんだ。

水森 苦手じゃないって。

風花 だって、今「に」って二回言つたもん。「に、苦手じゃないですけど。」

水森 ちよつと噛んだだけじゃない。

原 何でカエルとかバツタとかは平気なのに、幽霊とかは苦手なの。

水森 だから苦手じゃないですって。何で突然幽霊の話とかし始めるわけ。今は、先輩の彼氏の話でしょ。

原 あ、実は元彼が幽霊だつたって話 前にしたっけ？

水森 やめてください。

風花 いや、まだです。

原 聞きたい？

風花 聞きたい聞きたい。

水森 聞きたくないです！

原 やっぱ、怖いんだ。

水森 怖くないです。幽霊なんて所詮うそです。だって目に見えないんですから。目に見えないものは基本信じないんです。

風花 それが、見える人には見えるのよ。

水森 私は見えないもん。

風花 ミエルヒトニハミエルノヨ。

水森 何でそんな怖そうに言うの。

風花 先輩、見たことありますか。

原 だって、元彼がね。

風花 あ、そうか。

水森 「あ、そうか」じゃない！

原 あ、あそこに！

水森 キヤ~~~~ッ！

原 うそで、冗談だって。

着信音が鳴る。

水森 キヤ~~~~ッ！

原 ケータイ、ケータイ。あんたの。

水森 もう！

原 メール？

水森 はい。

原 誰から。

水森 別に。

原 彼氏？

水森 友達です。

原 またまた。彼氏でしょう？

水森 いまさんから。

水森 いないはずの彼氏から突然のメールが…、キヤ~~~~ッ。
いいかげんにしてください。

風花 てゆうか、ケータイも不思議ですよね。声とか文字とか、写真とか動画

とか、何でも送れちゃうんですから。

原 今さら？

風花 いや、改めて考えると不思議ですよ。ちよつと先輩、ケータイいいですか。ちよつとメール送りますね。

原 来たけど、何。

風花 ほら、ね、今、私の送った文字が、先輩のところにこうやって届くわけですよ。この辺の空気のもやもやとしたところで、澄香の体とかもすり抜けて、何か、目に見えないけど、何かがここを通過して、シユバババッて、こっちからこっちに移動するわけですよ。何かすごくないですか。

原 うんうん。

風花 こことか、あそことか、この辺とか、あの辺とか、もうありとあらゆるところに、声やら文字やら写真やら動画やらがうようよさまよっているわけですよ。

水森 何が言いたいわけ。

風花 だから、幽霊とかも、目に見えないだけで、ホントはいるんじゃないかってこと。

原 なるほど。

水森 納得しないでください。

風花 そのうち、幽霊なんかも映し出せる機械か何か、発明されるかもしれないね。

水森 だから怖いって。

原 そうしたら、いつでも会いたいときに会えるかも。

風花 いいですよね。

水森 よくない！

陽菜が戻ってくる。

陽菜 ただいま。

水森 うわ~~~~っ！

陽菜 あ、水森先輩、お疲れさまです。

水森 もう、びっくりさせないでよっ！

陽菜 すみません、昼間練習休んじやって。

水森 心臓止まるかと思った。

陽菜 すいません。私、雨降ると体調悪くなるっていうか、晴れたらすごく元気モリモリなんですけど、今日は昼間すっごく雨降って、あ、でももう晴れたからこの通り、大丈夫です！
（蚊帳に入る。）

原 いや、大丈夫なのはいいけど。

陽菜 何ですか。

原 いや。

陽菜 あ、これですか。いいですよ、蚊帳。蚊対策にはこれが一番です。

原 ああ。

陽菜 それより、あそこの食堂マジヤバくないですか。にんにくの臭いハンパないってゆうか。でも、にんにく料理何もないって、どういうことですか。てゆうか、私臭ってませんか？ 大丈夫ですか。

原 ファブリーズしてあげようか。

陽菜 え？ 何で持ってきてるんですか。じゃ、お願いします。

原 凄かったでしょ。あのにんにく。

風花 いよいよ、陽菜ちゃんにも、このことを告げるときが来たんですね。

原 そうね。

陽菜 え？ 何のことですか。

原 ねえ、茜たち食堂いなかった？

陽菜 キヤプテンですか。いや。私が最後だったみたいで。

原 いやね、あの、茜たちのスイミングクラブね、一緒に合宿してる、そこに、代々伝わる秘密兵器があるわけ。

陽菜 秘密兵器？

風花 その名も、特製にんにくジュース。

原 スタミナつけさせるために、練習前に必ず飲ませてるの。うそ。

原 うそじゃないし。私も中学までそこに通ってたんだけど。でも、ま、そのにんにくジュースに耐えきれなくてやめたんだけどね。

水森 ジュースだけならともかく。

原 そうそう。こういう合宿のときには、特製にんにくドレッシングと特製にんにくソースを大量に持ち込んでるわけ。

風花 去年見たとき目が点になったよ。

原 ハンバーグに〜！

風花 にんにくソース！

陽菜 何かおいしそう。

水森 サラダに〜！

風花 にんにくドレッシング〜！

陽菜 いいじゃん。

原 カレーライスに〜！

風花 にんにくソース！

陽菜 それはちよつとどぎつそうね。

水森 デザートゼリーに〜！

風花 にんにくドレッシング〜！

陽菜 あ、それ無理。

原 仕上げは特製〜、

原・風花・水森 にんにくジュース〜！

陽菜 あ。それで。

原 ん、何が。

陽菜 火野先輩、何かいつも臭うなって。

風花 ストレートに言わない。

陽菜 あ、ごめんなさい。

原 いいじゃん、ホントのことだし。

陽菜 ごめんなさい、変な意味じゃ。

水森 みんなね、知らんぷりしてるだけ。慣れば別に気にならないから。

風花 私、気になる。たまに先輩入ってくると、そつと風上に移動したりとか。でも、謎が解けてすっきりしました。

陽菜 謎って？

陽菜 いや、…あ、いえ、何でもないです。

原 また〜。そこまで言ったんだから。

陽菜 まだ何も。

水森 何なに。

原 何かね。陽菜ちゃんが、あの人の悪口言いたいみたい。

陽菜 悪口じゃないですって。

水森 何よ何よ。言ってこらん。

陽菜 何でもないです。

風花 大丈夫。みんなあの人のことはこんな風に扱ってるんだから。で、あの

水森 にんにく女がどうしたの。言うね〜。

原 謎って何。思ったこと正直に言っていんだよ。
陽菜 あ、たいしたことじゃないんです。いや、火野先輩が、何かいつも臭

うのは、その、にんにくのせいだったってことですね。いや、私ははつきり、何か臭いを発する体質なのかと思ってました。ってことです。

原 それだけ？

陽菜 あ、はい。

原 なんかつまんない。

陽菜 だからたいしたことじゃないって。

風花 でも嫌よね、にんにくの臭いを発する体質って。

陽菜 ごめんなさい。

風花 体からにんにくの臭いがサッツ。

原 いや、分らないよ。ホントはそういう体質なのかもしれないし。むしろにんにくの臭いでそれをカムフラージュしているとか。

水森 臭いって、目に見えないから余計怖いですね。あ。

風花 そうそう。目に見えない恐怖があなたを襲う。

水森 やめ〜！

原 とにかく、キャプテンといるときは、よく換気をして、密室にならないことが重要ってことね。

風花 はい。

原 自殺行為だからね。

風花 あ、そんなことより問題は、だから今度の大会ですよ。

水森 大会？

風花 リレーのメンバー。先輩、この四人でリレーに出るって、できないんですか？

原 それは無理。

風花 何ですか。

原 だって決めるのは茜だし。

風花 先輩はそれでいいんですか。

原 いいとは思ってないけど。

風花 先輩からキャプテンに言って下さい。私たち、納得できませんって。

原 それは…。

風花 先輩。

陽菜 あ、すいません、何か、にんにく臭くないですか？

水森 そうそう、私も思った。

原 え、私？

風花 私？

原 うそ、ファブリーズしたのに。

水森 違いますよ。何か、廊下の方から臭ってきます。

原 もしかして？

四人 キャプテン！

火野がどたとと駆け込んでくる。

火野 どうも〜。わ〜良かった、みんないた〜。

風花・水森・陽菜 こんにちは。

火野 もつ、そんな堅苦しいあいさつはなしなし。ハイハイハイちよつとお邪魔しますよ〜。

原 どうしたの、茜。

火野 いやね、今度の大会のリレーのオーダーをここで決めようと思って。あ、風花たちちよつとテーブル出して。

風花 はい。

火野 てゆうか、何これ？

陽菜 あ、すいません。

火野 うわ、びっくりした。

陽菜 片付けます。

火野 あ、いいよ。それより、陽菜ちゃん、来てたの？ ごめん、気づかなかった。

陽菜 すいません。昼間は体調悪くて寝てました。(蚊帳から出てくる。)

火野 あ、そうなんだ。あ、じゃみんな、座って座って。

火野が、折たたみ式ローテーブルの中央に座る。
若干距離を置いて、四人がその周りに座る。

火野 どうしたの、もつと近くに寄って。

原 ああ、いいよ、ここで。

火野 これじゃ話し合いにならないでしょ。

原 大丈夫。ほら、近づくと、なんか暑いし。

水森 そうそう。

火野 そうお？ 変なの。じゃ、私が考えてきたんで、まずそれを言っちゃっていい？

水森 はい。

原 どうぞどうぞ。

火野 と言っても、あくまでも、仮の案だから。これからみんなの意見を聴いて、そこからまた変更だつて大いにありだから。

原 分かった。

火野 それじゃ、今度の大会のリレーのメンバーの仮の案を発表します。

風花 あ、すいません。

火野 何？

風花 すいません、その前に、ちよつと窓開けていいですか。

火野 え？

原 そうね、ちよつと暑くなってきたし。

火野 そんなことないでしょ。

水森 いやあ暑いすねえ。

風花 じゃ、開けま〜す。

原 あ、風花ちゃん、うちわ貸して。

風花 あ、はい。

水森 私も。

陽菜 私も。

風花 こんな時のためにいつぱい持ってきてたんです。

火野 そんなに暑くないでしょ。

原 あ、茜。あんた扇いであげる。

四人、うちわで火野の方を扇ぎ始める。

火野 何がしたいの。

水森 気にしないでください。

火野 すっごく気になるんだけど。

陽菜 うわ、蚊、蚊。

原 こっちにも。

火野 窓閉めればいいじゃない。

四人、蚊に翻弄される。
陽菜、蚊帳に入り込む。

原 陽菜ちゃん、入れて。
水森 私も。

陽菜 入るとき気をつけてくださいよ。

風花 私も。

陽菜 うわ、せ、狭いです。

四人、蚊帳に入る。
引き続き、火野を扇ぎ始める。

火野 いや、何かおかしいでしょ、この図。

陽菜 キヤプテンすいません、もう定員オーバーです。

火野 入らないわよ。

水森 先輩、大丈夫ですか、蚊。

火野 あ、私？ うん、何かね、刺されない体質みたい。てゆうか（パチン、潰せば大丈夫よ、こんなの。（パチンパチンパチンパチン）

四人、蚊帳でひそひそ話し始める。

風花 え、何？

水森 ほら、ドラキュラの苦手なもの。

風花 え、十字架？

原 と？

陽菜 あ！

水森 シッ！

火野 窓閉めるよ。

風花 あゝ。

原 蚊もドラキュラみたいなもんだからね。

火野 えーっと、いつまでそうしてる気？

風花 気にしないでください。

火野 いや、気になるでしょ。

原 で、オーダーは。

火野 うん、じゃ言うね。まあ、一応、第一泳者はチャコ。

陽菜 誰？

風花 原先輩。久子だから。

火野 第二が澄香、第三が陽菜ちゃん、でアンカーが私。タイム的にはこれがベストだと思っただけど、何か意見ある？

陽菜 いや、私はまだ一年だから、いいですよ。風花先輩を出してください。

火野 でもタイム的には陽菜ちゃんの方が上だし。やっぱ実力がある方が出ない。というわけだから、ごめん、風花には悪いんだけど。

風花 いや、いいですよ。

火野 じゃあ、これで決まりでいいかな。

水森 あ、先輩。蚊！（原の顔をパチン

原 痛っ。

水森 獲れました。あ、すいません。

原 いや、いいけど。

陽菜 てゆうか、何でここに蚊がいるんですか。

四人、蚊帳の中を見回す。

陽菜 あ、蚊が入ってきています！

原 うそ！

陽菜 みんな、出てください！

原 水森、風花、蚊帳から出てくる。

陽菜 もう！ だから入るとき気を付けて下さいって言ったじゃないですか！
もう最悪です、これじゃ蚊帳の意味がありません！

火野 じゃ、いいじゃんもう。片付けちゃいなよ。すげえ場所取ってるし。

陽菜 嫌ですよ。蚊に刺されたら最悪ですもん。

火野 死にはしないでしょ。

陽菜 蚊をなめちゃいけませんよ。マラリアとか伝染病を媒介するのも蚊の作業なんですから。

原 最悪、蚊。死ねっ、人類の敵。

火野 そんな大げさな。てゆうか、何でみんなそんな遠くに座ってるわけ。

原 いや別に。

火野 ね、さつきから気になってたけど、ひよっとして私、避けられてる？

原 そんなことないよ。

火野 うそ。何かみんな変。

原 違うって。

火野 私だってさ、こんなことやりたくてやってるわけじゃないけど、でも、一応キャプテンだからさ、メンバーを決める責任はあるわけじゃん。でさ、先に言ったじゃん、まだ飯の案だから、違う意見はどんどん出していいって。私だって風花を外したいわけじゃない。だけど、リレーは四人だからさ、誰かが外れないと。

陽菜 私、いいですって。風花先輩を出してください。

水森 いや、陽菜ちゃんは出なよ。私が外れるから。

風花 いいよ、ありがとう二人とも。一番タイム悪いのは私なんだから、私が外ればいいことですよ。

陽菜 私は来年もありますから。

風花 陽菜ちゃんが出ないと。私が出たら、みんなに迷惑かけちゃうし。

水森 迷惑なんてそんな。

陽菜 迷惑じゃないですよ。

火野 だから、もっところち来て話しようって。

原 思ってたんだけど。

火野 何。

原 思ってたんだけど、茜が外れるってことはないの。

火野 え。

原 いや、例えばの話だけど。

火野 言ってる意味が分かんないんだけど。

原 そう。

火野 いいよ。別に。個人もあるし。私はね。

原 だから例えばの話だって。

火野 あれ、澄香ちゃん。目、どうした。

水森 え？

火野 目。

水森 あ、ちよつと。

火野 かゝわいゝいゝ。何これ、アイプチ？

水森 うmっ。(風花の方へ逃げる。)

火野 ちよつと澄香。

原 あのさ、茜。

火野 何。

原 え、何。それは今日中に結論出さなきゃいけないことなの。

火野 何が。

原 いや、オーダー。

火野 いや、締切は今週末だけ。

原 じゃあさ、また今度でいいじゃん。合宿はまだあと三日もあるんだし。

火野 いや、だからさ、オーダー決めて、実践的な練習とかしたいな、とか思
つて。

原 それよりさ、一年も二年もあと三日間でどれだけ上手くなるか分からないし、その成果を見てからでよくない。

火野 でも、メンバーになった方が練習に気合が入るってことあるじゃん。

原 選ばれなかった奴はどうすんの、この三日。

火野 個人があるじゃん。そっちで頑張ってもらえば。

原 だいたい、あなたの部屋こっちじゃないでしょ。さっさとクラブの人た
ちのそこ戻ったら。

火野 だって、向こう筋トレとかばっかりしててつまないんだもん。

風花 あ、先輩、幽霊って信じます？

火野 何、突然。

風花 あの、幽霊って信じます？ さっきみんなでそういう話してたんですよ。

澄香だけすつこくびびって、もう爆笑。

火野 え、何なに、そういう話で盛り上がってるの。いいなあ、楽しそう。あ、
そうだ。ねえ、私もこっちに泊まっていいかな。

風花 え。

原 ちよつと待ってよ。あんた、クラブの人たちと泊まるんでしょ。

火野 いや、そのつもりだったんだけど、やっぱ、同じ高校同士、同じ部屋に
泊まるってのが筋よね。よし、分かった、ちよつと待ってて。私、荷物
取ってくる！

原 ちよつと茜！

火野 走って出ていく。
やや間。

原 ……どういふこと？

風花 ……。

原 ……何であんなこと言ったの？

風花 すいません。何か、ピリピリしてたから、何となく、話題変えようとし
て。……すいません。

水森 幽霊なんかより、今のこの部屋の空気の方がよっぽど怖いよ。

原 あゝあ。私さ、やっぱ茜のこと苦手みたい。(ファブリーズをまく。)

陽菜 あの臭い、強烈でしたよね。

原 いや、それもあるんだけど、何か、生理的にダメだわ、茜のこと。何か、
話聞いているとイライラするっていうか。すごいストレスたまる。クラブの
時から超KYと思ってたんだよね。

原 廊下の方までファブリーズをまきに出る。

風花 水森 陽菜 顔を合わせる。

風花 …ま、それを聞いて私たちにはどうすることもできないというのが悲しい現実なんですけど。

原 とにかく、茜と一緒に寝たいんだったら、みんな遺書を書いておくからね。

風花 はい。(書いている)

原 冗談に決まってるでしょ。

陽菜 あ、一つ質問いいですか。

原 何。

陽菜 何で火野先輩がキャプテンなんですか。

やや間。

陽菜 あ、やっぱいいです。

原 いいよ別に。もう気にしてないから。

風花 あの顧問、練習も見に来てないのに、どうかしてます。

水森 そうそう。

原 だからいいんだって、もう。あのときは取り乱しちゃってごめん。

風花 いや、あれは顧問がおかしいです。

陽菜 顧問って、菅っち？

風花 菅っちは今年から。去年はハタ山。

陽菜 ハタ山？ あの宇宙人？ あれ顧問だったんですか。

水森 そうだよ。去年までね。私、ハタ山に勧誘されて入部したんだから。

風花 私も。水泳についてすごく熱く語られて、その熱意に押されて、つい。

水森 でも、それもホントに最初だけで。

風花 そうそう。夏を前にすっかり練習見に来なくなつて。そのくせ、次のキャプテンは原先輩でいいですかって言いに行ったら、『ダメだ。火野の方がタイムが上じゃないか。俺は実力主義者だ、次のキャプテンは火野だ』って。

原 ああ思い出したら何かまたムカツいてきた。

水森 先輩、落ち着いて下さい。

風花 もう！ 陽菜がよいいなことから。

水森 いやあんたでしょ。

原 大丈夫、ここにはビート板ないから。もうたたき割ったりしない。

陽菜 ビート板たたき割ったんですか。

風花 陽菜。

原 あゝあ、一年の時のヤソウ先生がよかったなあ、顧問。国語の先生のくせによく漢字間違えるけど。私、「久子」って漢字、一回オーダー表に「力子」って書かれてたからね。ちからの子。原力子（ハラリキコ）。私最初、何でオーダー表に「原力子」って書いてあるんだろうって不思議に思ったもん。

風花 それウケますね。

水森 でもホント、一年おきに顧問がコロコロ変わるのだけはやめてほしいですよ。

風花 菅っちもやめちゃうのかなあ。

水森 次は誰が顧問になるのかなあ。

と、四人の会話が止まる。

水森 来ました？

原 みたいね。

風花 窓は。

原 開けましょう。

水森 でも、蚊が入ってきます。

原 陽菜。

陽菜 大丈夫です。入り方さえ気をつければ。

原 じゃ、風花は窓を開けて

風花 ラジャ。

原 みんなは蚊帳に急ぐよ。

水森 ガッテン。

原 いい？ 何とかこっちの部屋に泊まらせないように上手くやるから、みんな、それまで耐えるのよ。

水森・風花・陽菜 はい。

原 移動！

陽菜 さ、こっちへ。

風花は窓を開ける。

四人、蚊帳に入る。

火野が荷物を持って入ってくる。

火野 おまたせ。

原・水森・風花・陽菜 おかえり。

火野 だから何がしたいの。

原 蚊対策。

火野 窓閉めればいいでしょ。

原 ダメ！

火野 何で。

原 命にかかわるから。

火野 え。

風花 イノチニカカワリマスカラ。

水森 怖い怖い。

火野 何なに、もう始まつてるの、怪談話。あれ？ 澄香の後ろ、誰かいらない？

水森 キヤ~~~~ッ。

火野 うそうそ、冗談。ホントに怖がりなんだね、澄香ちゃん。

水森 違います。

火野 今の瞬発力、スタートのときに活かせるかも。そうだ、ね、第一泳者は澄香ちゃんにしない？

原 そのことだけど。

火野 何。

原 決めたんだけど、今度の大会のリレーのメンバー、私たち四人で決めてもいい？

火野 え？

原 ……って言ったらどうする。

火野 何よそれ。

原 見てよ、この団結力。

火野 蚊帳に入ってるだけじゃない。

原 ねえ、どう？

火野 私の案じゃ不満ってこと。

原 学校の練習に来てない人に決めてほしくないだけ。

火野 その分クラブで死ぬほど練習してるんだけど。

原 ただでとは言わない。

火野 何。

原 勝負しましょう。

火野 勝負。いいわよ。百メートル？ 二百メートル？ 自由形？ 平泳ぎ？
あんた私に勝つ自信あるの？

原 違う。

火野 じゃ何よ。

原 今から五分、いや三分以内に、どちらが多く蚊に刺されるか。

火野 え？

原 刺された方が負け。

火野 ちよつと待って。

原 何。

火野 誰と誰が勝負するの。

原 茜一人と、私たち四人。

火野 蚊帳からは出るの。

原 出ない。

火野 圧倒的に不利よね、私。

原 刺されない体質だって。それを証明してもらおうと思つて。

火野 何これ、いじめ？

原 実験と言つてほしいわ。

火野 何の実験よ。

原 …蚊帳の、すごさ。

火野 私必要ないでしょ。

原 だから勝負よ。

火野 何の。

原 もし、茜が勝つたら、茜の決めたオーダーで行く。でも、私たちが勝つたら、私たちがオーダーを決める。

火野 だからちよつと待ってって。

原 用ゝ意っ！ ピッッ！

火野 うわうわ、殺すのはあり？

原 刺されなければ。

火野 えゝつと。

火野 蚊をよけたり、つぶしたり。
四人、うちわで火野を扇ぎ始める。

陽菜 うわ。(パチン)

原 何？

陽菜 ちよつと！ また入ってきてますよ！

原 え、うそ！

水森 先輩！

原 何？

水森 じつとしててください！ (原の顔をパチン)

原 痛っ！

水森 あ、ごめんなさい！

四人、蚊帳の中で逃げまくる。

結局 陽菜以外みんな蚊帳から出てくる。

原が、バッグから虫除けスプレーを取り出して、全身に噴射する。

水森 先輩、何ですか、それ。

原 虫除けスプレーよ。

風花 用意がいいですね。

原 みんなもかけて。

水森 はい。

風花 私も。

原 はい。

火野 私も。

原 ダメ。

火野 何で。

原 まだ勝負は終わってないから。

火野 何の。

原 虫除けスプレーの、すごさ。

火野 ルール変わってない？

原 はい、ここまで！ みんな、刺された箇所を報告して！

風花 私、三箇所。

水森 二箇所です。

陽菜 一箇所。

原 私は二箇所。合計八箇所。茜は？

火野 ゼロ。

原 うそ。

火野 だってゼロだもん。ほら。

風花 恐るべき、にんにくパワー。

火野 てゆうかさ、この頃の蚊って、鈍くね。ひよろひよろ飛んで。昔はもつと動きが素早かったような気がするけど。

原 よし、ウォーミングアップはここまでだ。

火野 何。

原 茜！ ここからが本番だからね。

火野 ちよつと待ってよ。

原 勝負は三本勝負！

火野 分かった分かった。ちよつと待ってよ。

原 いざ！

火野 ちよつと待って、って！

原 何よ。

火野 あのね、分かった。つまりさ、私を大会に出したくないってことでしょ。

だつたらこんな回りくどいことしないで、とつととそう言つてよ。

水森 ちよつと待ってください。

原 いいの、澄香。止めないで。

火野 何よ、さつきから。これは、はっきり言っていじめよ。そりや、学校の練習じゃなくてクラブにばかり行ってるのは悪いと思ってるけど、でもこれもみんなのためじゃない。私だって、もつともつと上手くなりたいもん。そのどこが悪いの。

原 誰も悪いとは言つてないけど。

火野 だつたら何でこんなことするの。

水森 ちよつと待ってくださいって！

風花 どうしたの、澄香ちゃん。

水森 ちよつと、様子が変なの。

風花 バッタ？

水森 みんなじゃないけど、何匹か。

風花 元氣ない。てゆうか、死んでる？

原 え、うそ。

水森 死んでるんです。他も、死にかけてたり。まだ元氣なものいるけど。

陽菜 何ですか？

風花 澄香が取ってきたバツタが死んでるの。

原 何で。

風花 さあ。

火野 ちよつと、何の話。

水森 黙っててください！

火野 え、何。

原 どこに置いてたの。

水森 そこです。

原 クーラーで冷えすぎたとかじゃないよね。

水森 じゃないです。そこは風が一番来ないところですから。あれ、これ何です

か。

原 ああ、これ？ ベープ。

水森 え？

原 ベープ。知らない？ 電気蚊取り。

水森 何でこれがこんなところにあるんですか。

風花 あ。

原 何でつて。持ってきてたから。蚊が多いことは分かってたでしょ。だから。

水森 じゃなくて、何でそれを早く言わないんですか。

原 え？

風花 先輩。

原 え？ これ？

火野 そりや、蚊に効くつてことは他の虫にも効くでしょうね。

原 あ、うそ。

水森 「あ、うそ」じゃないですよ！ 早くどっかやってください！ 人の命

を何だと思ってるんですか。

原 あ、ごめんごめん。…ほら、もう電源オフにしたから大丈夫だよ。

風花 (うちで部屋を騒ぎ始める。)

風花 風花は何してるの。

火野 いや、何か分かんないけど、何かその、ビームみたいなのを追い出そう

と思つて。

火野 ビーム？

原 …ごめんつて。あ、でも、でもさ、弁解するわけじゃないけど、どうせ

それ、カエルの餌にするつもりだったんでしょ。

水森 え？

原 どっちみち死んじゃう運命だったんだし。そうだ、また明日取りに行け

ばいいじゃん。ほら、もう、うじゃうじゃいて、入れ喰い状態だったんで

しょ。

水森 何てこと言ってますか。

原 え？

水森 自分の言っていることが分かってるんですか、先輩。

原 何。

水森 いいですか。カエルの餌になつて死んでいくのと、こうやってベープだ

か何だかで死んでいくのでは全然違うんです。ああ、俺はこうやってカ

エルの餌として死んでいくんだあって、命をつないでいくことを悟りな

がら死んでいくのと、あれ、何か体がおかしいな、あれ、俺何でこんなに

弱っているんだろう、あれ、俺どうしたんだろう、あれ、俺どうして死ぬんだろう、って訳も分からないまま死んでいくのでは、同じ死ぬにしても全然違うんですよっ！

原 ご、ごめん。

水森 もっとバッタの気持ちになって考えてください！

原 だからごめん、って。

水森 これじゃただの犬死にじゃないですか！

火野 バッタが犬死にっていうのも、あれだね。…あ、ごめん。

風花 やっぱ、何か出てたんですかね。目に見えないビームみたいなものが。

原 あ、どうすれば。

水森 もういいです。どうしようもないですから。

原 その、まだ元気なバッタ君たちは、カエルの餌として大往生できるかな。

水森 分かりません。どんな健康被害が出るか分からないし。

火野 大げさね。

原 いっそ逃がしてやったら？

水森 そんなことしたら、生態系にどれだけ影響を及ぼすか。

火野 そこまで言う。

原 …あの、ベープ、まだあるんだけど、全部電源オフにした方がいいかな。何考えてるんですか！ 早くしてください！

水森 あ、はい。

原と風花 方々のベープを集めて電源をオフにする。

原 これで、全部、かな。

火野 心なしか、蚊の量が増えてきたと思うのは気のせい？

風花 窓、閉めますね。(窓を閉める。)

火野 ん、どうした？

水森 いや、バッタが。

火野 逃げた？

原 うそ、どこ？

水森 あつちです！

原 もう、ちゃんとふた閉めといてよ！

水森 すいません、あつち！

火野 捕まえたよ。

水森 ありがとうございます。あ！(虫かごを落とす)

火野 ちよつと！

水森 すいません、全部逃げました。

原 ちよつと勘弁してよ！ 私虫大っ嫌いなんだから！

陽菜 頑張ってください。

原 見てないで何とかしてよ！

水森 先輩、背中！

原 え、どこどこ！

水森 背中です！

原 うわあ、もう！ 死ねえ~~~~っつっ！！(キンチョールをまきちらす。)

火野 チャコ、やめて！

原 死ねえ~~~~っつっつ！！！！！！！！

水森 やめて~~~~っつ！！ いやあ~~~~っつ！！

間。

原 ……終わった。

水森 ……バツタが、バツタが。

火野 やりすぎよ、チャコ。

原 あ、ごめん。でも。

水森 ひどいですよ！

原 だってだって、背中とかに跳んできたら怖いでしょ、誰だって！
水森 ここまでやらなくなつて。

原 だいたい、バツタとか捕まえてくる方がどうかしてるし。

火野 ケホッ。チャコ、キンチョールまきすぎ。

陽菜 何か、頭痛くなってきました。

風花 すいません、窓を開けていいですか。

原 虫が入ってくる！

風花 換気しなくちゃ。

原 じゃあ、ベープ！

水森 ダメです！

原 もう死んじゃったからいいじゃない、バツタは。
水森 ダメったらダメです！

水森 ベープをすべてゴミ箱に捨てる。

原 虫除けスプレーを全身にかける。

火野 かけすぎだよ。

原 だって、蚊が入って来るんだよ！

火野 蚊くらい我慢しろよ。

原 刺されない奴はいいよ、でもこっちは刺されるんだよ、かゆいんだよ。

火野 なんかこっちまで気分悪くなってくるし。

原 言つとくけど、あんたのにんにくの方がよっぽど気分悪いから。

火野 何。

原 にんにくだよ。

火野 しょうがないでしょ。スタミナ源なんだから。

原 どんだけ臭いか分かつてんの。みんな迷惑してんだよ。

火野 何よ。え、あんたたちも？

水森 でしたけど、今は。

原 え。

水森 原先輩の方が、ぶっちゃけ嫌です。

原 澄香。

水森 ……。

火野 私のせい？

原 え？

火野 何か、こうなつたの、私のせい？

原 そうだよ。キャプテンのくせに、クラブにばかり行って。そのくせ。

火野 そのくせ？

原 別に。

火野 リレーに出るのはおかしいって？

原 そんなこと言っていない。

火野 私が出なくて県大会行ける？ あんた、個人で入賞できるの？

原 ……。

水森 ……あの。

火野 何。

水森 原先輩を外すつてもありますか。

火野 原 え。
火野 何のこと。
水森 リレーのメンバーです。
原 ちよつと。
火野 ごめん、それはない。
水森 分かりました。
火野 基本、外れるのは一年か二年。
水森 言ってみただけです。
火野 実力の面でもそうだし。私たち三年は進路もかかっているから。
水森 もういいです。言ってみただけですから。
風花 進路？
火野 え？
風花 進路って何ですか。進路もかかっているって。
火野 いやね、県大会以上に行ったら大学の推薦がもらえるの。私も、チャコも。チャコは個人が少し厳しいから、リレーだけでも入賞させてあげないと。
風花 そうだったんですか。

やや間。

風花 …原先輩。先輩の考えたオーダー、言ってみてください。
原 何で。
風花 先輩、火野先輩を外す考え、ありました？
原 何でそんなこと聞くの。
風花 いいですから。
原 あ、あったよ。
風花 なかったんですね。
原 あったって！
風花 だって、今「あ」って二回言いましたもん。「あ、あったよ」って。
原 それが何。
風花 火野先輩が必要だと思っただったら、初めからそう言えばよかったじゃないですか。
原 何言ってるの。
風花 私は別に、火野先輩の決めたオーダーで構いません。
原 ちよつと待ってよ。あんた、茜がオーダーを決めるのは納得できないって言ってたじゃない。
風花 でしたけど、火野先輩は、私たちのことを、ちゃんと考えてくれてるみたいですから。
原 ちよつと待ってよ。何、みんな、手のひら返したみたい。茜がいないとき、部活を引っ張ってきたのは誰？ それでも、茜の言うことの方がいいって言うわけ。じゃ、私は何？
水森 先輩は気づいてないかもしれないですけど。…先輩結構強気なところあって、人の悪口とかも平気でズバズバ言うし、キレると何やらかすか分からないから、正直、びくびくしてました。あんまり機嫌損ねないようにって。
風花 澄香。
水森 風花も言ってたでしょ、前。
風花 ちよつと。
水森 みんなびくびくしてるんです。だけど、練習毎日来てくれるし、先輩いないと勝てないのも分かっているし、火野先輩のこと悪く言うのは、ホントはあんまり好きじゃなかったけど、でも原先輩、たまにアイスとかおごっ

てくれるし、面白いこと言ってくれるし、原先輩の泳ぎ、めっちゃフオームがきれいでかつこいいなあって思ってるし、とにかく、原先輩も火野先輩も、時々嫌いなところもあるけど、でも、二人とも大好きだから、だから、……二人とも、もう少し仲良くやってください！

風花、**うちわで部屋を扇ぎ始める。**

火野 だから、風花は何やってるの。

風花 いや、その、換気しようと思っ

火野 そんなんで出て行くの、その何たらビーム？

風花 分かんないですけど、何もしないよりはいいかと思っ

火野 蚊、あんまりいないね。

風花 大量にまき散らしましたからね、キンチョール。

火野 蚊が多くて有名なところなのに。

風花 この部屋だけ、蚊のゴーストタウンですね。

火野 あ、蚊。

風花 え、どこですか。

火野 そこそこ。

風花 ホントだ。

火野 何か、ひよろひよろ飛んでる。

風花 あ、こつちにも。

火野 陽菜ちゃん、蚊帳入れてくれる？

風花 あ。

いつの間にか、蚊帳の中で陽菜が寝ている。

火野 具合悪いの？

風花 たぶん、寝てるんだと思います。

火野 こんな時間に。

風花 彼女は日暮れとともに眠くなるらしいですから。…そろそろ、いいですかね。

風花、**扇ぐのをやめる。**

原が、うちわで扇ぎ始める。

風花 先輩。

原 何か、気になって。

風花 先輩。

原 何か、気になるんだよ。その、変なビームが、まだ何かいっぱい残ってるんじゃないかって。キンチョールも、あんだだけぶちまけたから、何か、壁とか、畳とかにも、まだいっぱい残ってるんじゃないかって。

風花 そんなこと言ったらキリがないですよ。

原 分かってるけどさ、だけど、何か不安じゃない。目に見えるわけじゃないし。何かさ、測るものとかないのかな。あととんだだけ残ってるのとか、とんだだけになったら人体に影響はないのかとか。

風花 気にしすぎですよ。

原 じいちゃんがさ、言ってたんだ。じいちゃんの周りにはさ、昔、農薬とかバンバンまいてたんだって。だけど、じいちゃん、ある時から、絶対農薬は使わないって、固く心に誓ってたんだって。だけど私、いつの間にか、じいちゃんの言うこと聞かなくなっ

原、扇ぐのをやめない。

火野が、うちわを取り出し、扇き始める。

原が、それに気づいて手を止める。ややあつて、また扇き始める。

やがて風花、水森、そして、陽菜も起き上がって、みんなで扇き始める。
五人ですつと、ずつと、ずつと扇き続ける。

幕